

最後に、終始時間にルーズであった私達に常に寛大で、他方懇切丁寧に指導して下さった先生にお礼を申し上げたい。加えて、前期試験直後だった事もあって予習もせず、四日間狐につままれていた、とは不勉強な学生の言である。

( 浅海先生指導 1年 蔭山美千代 嶋ゆり子 )

## 那須・塩原巡検 ( 7月12日～15日 )

待望の夏休みを迎えて、すぐ、私たちは、東京を脱出し、栃木北部をめざして、巡検のりこんだ。テーマは、海拔高度の上昇に伴う営農類型の変化、平地村から山村までの生活様式の変化と、農村景観の観察であった。

12日小じんまりとした町並の西那須野は、雨であったが、公民館長のていねいで、熱のこもったお話しは、何よりの歓迎であった。那須扇状地の開拓の歴史と、現在の状況をうかがったが、三島通庸、松方正義などの明治の豪傑の名前がでてくるだけで、歴史の一舞台となったのだと、当時の開拓の様子が、さまざまに想像された。しかし、ねこの目農法で、日本列島改造論のあおりをうけて、大変だともおっしゃっていた。午後は、生憎の雨で、戦後開拓の日の出町には、行けなかったが、千本松農場の酪農と、この地を潤おす役割を果たした那須疎水の見学を行った。この日、温泉町の塩原に宿泊。

13日朝のすがすがしさの中、大沼まで縦走。久しぶりの山歩きで疲れたが、トチの木の美しさと、数知れず、飛びかうトンボが印象的であった。巡検ならではのハイク、しかし、友は、早く人家が見たいとさわいでいた。新湯近くの山すそでは、観光農園がみられた。午後は、鶏頂山開拓村へ向かった。農家20戸が100haの土地で、機械を導入して、大規模に、高冷地農業を行っているところ。大根、白菜など、幾種かの蔬菜栽培を行い、近年は、人手がかかるが、軽くて、効率のよいハウレン草栽培が中心であるとの事だった。24年には、10戸が入植し、多少変動しつつ、現在に至っているが、整地から、収穫までの多種の機械、冷凍室の設備など、投下資本が大きいのに驚いた。高冷地蔬菜にかける意気込みが感じられた。しかし、土壌の整備、労働力確保など、やはり、問題となっていた。又、日常生活面、子供の教育機関の不都合さも、大きな苦勞であるようだった。

14日午前中は、開拓村の土地利用調査を分担して行ったが、よく食する野菜も、苗や、双葉のうちでは、見わけるのが、なかなかの難事業であった。朝早くから、せつせとみなさん働いて、大変だなと思ったが、土とともに生き、手応えのある労働だと感じた。鶏頂山には、野ばらがよく似合う。

バスは、長い長い距離を走り、深く深く、山合いに入り、五十里ダムを下にみて、2時間ぐらいして、ようやく野門に着いた。ここは、平家の落人部落というキャッチフレーズで、近年民宿を始めた所だった。狭い山あいには、18軒の家と、社が、ひっそりと、ぽんとうに、社会のわずらわしさから取り残されたように、たたずんでいた。民宿も、鶏頂山のスキー客目あての新しい宿泊施設と異なり、芽ぶきの昔ながらの大きな家を、そのまま利用した、素朴なものだった。夜は、御主人に生活の変化や、養蚕、狩猟などの生業の変化について、いろいろお聞きした。この夜は、親睦を深めるための宴があったが、きびしい巡検の中、一時くつろげて、楽しかった。

15日最後の日は、自由活動。川俣ダム建設に伴う集落移転と、その後の生活の変化などのききこみなど、分散して、行った。

酪農、高冷地農業、その他の蔬菜栽培などを、見聞し、そこに住む人のさまざまな生活に触れ、密度の濃い巡検だったと思う。(斎藤先生指導 2年 木村多美子)

## 白馬巡検(10月5日～8日)

秋休みにはいったばかりの10月5日、白馬村の自然と集落の立地というテーマで、私たちの巡検が始まった。

5日。1:30白馬駅集合。まず役場へ。ここで、白馬の概況について話を聞く。それによると、白馬連峰のダンディな山並を控え、そこから流れ出す河川の扇状地上に形成されたこの村は、農業には見るべきものはない。代って、冬の雪、夏の冷涼な気候を利用した観光産業(スキー場・学生村)によって、成り立っているとのこと。役場を出て、瑞穂という集落に向う。途中で雨に降られる。雨の白馬は、10月初旬とは思えぬほどの寒さである。瑞穂は、平川の扇状地の、もともと水田には向かないところに、昭和22年より開拓された新しい集落で、農家という農家は、皆民宿でもある。雨とあまりの寒さに、早めに切り上げて宿舍へ。夕食後、旅館のおじさんのお話を聞く。

6日。雪をかぶった白馬連峰が鮮明に見える、すがすがしい朝。まず平川の砂防ダムへ。ここで、付近の地形、礫の種類等を観察。紅葉前線が1100m程度まできている。扇状地上の集落分布の説明を受けながら、深空を通り、神城の湿地帯へ。ここで、土壌を調査。この後、全員で、翌日のグループ巡検の下見に。蔵平、峰方、大出。それぞれ特色がある。地図上で選んだ自分の受け持ちの集落を実際に見て、それぞれ一喜一憂。落倉、新田へ向う前に、小谷村を通り、稗田山大崩壊の現場へ。身のすくむような浦川の谷の細道を、バスに揺られて30分。これだけの山が、一晩のうち土石流に化したことを考えると、大自然の営みのスケールの大きさに、圧倒されるばかりである。帰り道、川内、落倉、新田を通り宿舍へ。

7日。いよいよグループ巡検だ。3人1組となって、不安と期待を胸に、それぞれが事前に決定した集落へ向う。自然条件、建て物の配置・規模・用途、農地との位置関係、集落立地の理由、他集落との関係、農業と観光等、その集落が白馬でどのような位置を占めているか、集落の立地と機能を調査。聞き込みが中心となるこの巡検、それぞれが貴重な体験を得た。この忙しいのに何しに来た、とどられた者、大歓迎を受け、いろいろごちそうになって帰って来た者、冷害で稲が実らないので、どうして生計を立てていいか解らないと、老婆にこぼされた者、さまざまである。

8日。最終日。この日は主に地形が対象。まず松川上流の南股へ。段丘面等の観察。この時、紅葉前線は900mにまで下っていた。次に北股へ。途中でバスを降り、大雪溪に見える白馬尻まで歩く。そこで、氷河の擦痕を観察。その後、白馬駅にもどり、12:00解散。

今回の巡検は、今までのものと比べ、一段と意義深いものであった。自分たちで、見、聞き、考える。見知らぬ人と語る中に、その土地の生活実感を肌で感じる事ができた。小さな体験ではあるが、